

自分達の地球は自分達で守る

酒田市立第一中学校 3年 菅原 光貴

「人の心を変えるには、まず自分が変わらなければならない。」

外国語で書かれた菓子袋、魚網、中身が腐敗したペットボトルなど大量のゴミが海岸を埋め尽くしていた。僕の住む酒田の沖合40 km離れた飛島でゴミ拾いボランティアをした時の光景です。飛島は季節風や海流により日本で一番漂着ゴミが多く、その量は年々増えています。一体どこから流れてくるのか疑問に思い、近くの海洋センターへ行きました。

海洋プラスチックゴミはASEAN 諸国を中心とする発展途上国から流出したものが多く、貧困地域では適切に処理できず放置したゴミが川から海へ流出していました。一度海に流れ出たプラスチックは自然分解されず半永久的に蓄積し続けてしまいます。更に衝撃的なことに、日本を含む先進国はプラスチックゴミを人件費の安い開発途上国へ資源として輸出していたのです。行き場を失ったゴミは深刻な環境問題を起こしていました。このまま何も行動しなければ2050年、僕が大人になる頃には生まれ育った酒田の海は魚より海洋プラスチックゴミが上回ってしまいます。

「そんなことはさせない！」僕は少しでも環境破壊を食い止めたいと思い少年少女国連大使に応募しました。

研修先のスイスでは欧州国連本部を訪れ「SDGs」を学びました。またSDGs 推進度世界一のスウェーデンでは日本との大きな違いを感じました。電力の60%は再生可能エネルギーから供給され、バナナの皮などの生ゴミを利用して走る市バスもあります。一般家庭ではゴミを100種類以上の分別は当たり前。ゴミのリサイクルへの意識の高さに驚きました。地元の中学生と交流した際に、なぜ積極的にSDGsに取り組んでいるか聞きました。すると「授業で習い、皆関心を持っているよ」と教えてくれました。学校では環境に対して正しい知識を学び、考えを深める授業が行われていて、教育に大きな差があることに気がつきました。日本の子供達が世界の現状を正しく知り、SDGsを身近に感じる事が最も重要であると思いました。

帰国後、僕は変わりました。15歳でもできることを考えレジ袋をもらわず、外出するときは必ずマイボトルを持ち歩くようになりました。まずは一人一人が意識を変えること。そして小さな行動も世界を変える大きなきっかけになると僕は信じています。この経験をより多くの人に伝えていくことが僕の使命だと強く感じ、学校や地域で啓発活動をしています。

海洋プラスチックゴミ問題一つでもゴミの処理方法や再生の技術、プラスチックの代替品など様々な事を繋げて解決していかななくてはなりません。これから僕は、持続可能な世界を達成するために同じ目標を持つ様々な国の仲間と協力して、自分達の地球は自分達で守っていききたいと思います。